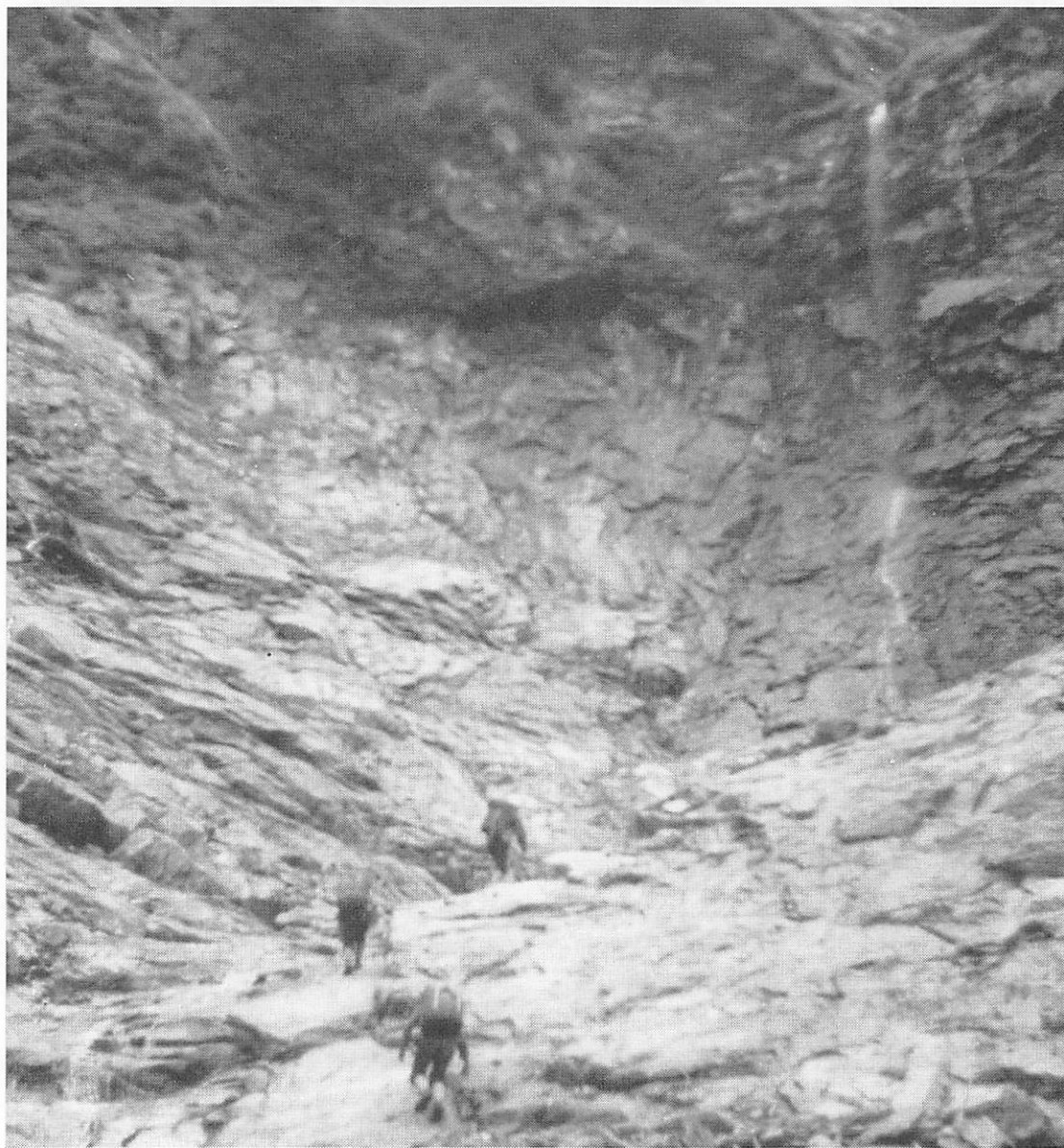


# 北の自然

北海道自然保護連合通信

No.76 2006.4.30



日高・ルベツネ山 北面直登沢・F1

「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定する」要望書を環境省などに提出

1月30日 北海道自然保護協会  
3月18日 北海道自然保護連合など11団体

「日高山脈と夕張山地を合わせて新たな国立公園に指定する」

運動を一緒に展開しませんか！

北海道自然保護協会  
会長 佐藤 謙

私たち北海道自然保護協会は、標記のように「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定することの要望書」を関係行政機関・地元市町村とともに北海道各地の仲間にお送りしました。その後まもなく、北海道自然保護連合では一緒に運動していただけるという合意が得られたとお聞きし、非常に嬉しく思っております。

日高山脈は、とくに、原始的な自然が山地帯から高山帯まで広大に拡がる特徴がありますが、我が国の国立公園の中で突出した面積を誇りながらも、その価値が十分に知られず、国立公園だけのランクにあります。また、夕張山地は、とくに、特殊な地質と対応した固有植物の豊富さに特徴がありますが、面積要件によって（質ではなく量によって）道立自然公園に指定されただけにすぎませんでした。これら2つの地域は、それぞれ単独でも、我が国において特記される自然公園ですが、面積要件がかかっていることから、2つを合わせて1つの国立公園にし、保護を重視した方が良いと考えた次第です。

ところで、自然公園法には、保護と利用とい

う2つの目的があり、最近、自然公園の各地において、後者の利用を重視する余り前者の保護がないがしろにされる嫌いがあり、それによって自然破壊が生じることも事実です。しかしながら、国立公園や道立自然公園のままでも、自然公園における上記の欠点が伴うことは同じです。私たちは、前記2つを合わせた地域を、真に保護を重視した国立公園にすることができると考えた次第です。ちなみに、これらの予定地は、IUCNによる国際的な国立公園の基準に該当します。

世界自然遺産は、自然の保護を重視した国際的な制度ですが、我が国では、先に指定された屋久島や白神では自然の利用が重視され、自然が荒れる実態が認められます。そのような自然荒廃が知床でも危惧されており、指定以前にその是非に関する論議がありました。したがって、自然公園ではなおのこと、とりわけ保護と利用という2つのキーワードについて、私たちは深く考えなければならない点が課題となります。すなわち、自然たる自然を壊さないことを目的としながら、どの程度の利用ができるか、

私たち自身が相互に種々の考えを照合しなければなりません。

何はともあれ、真の国立公園指定を目指し

て、一緒に運動していただきたいと願っております。

## 「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定する」要望書を環境省などに提出

1月30日 北海道自然保護協会  
3月18日 北海道自然保護連合など11団体

## 日高山脈と夕張山地を国立公園とすることの意義

北海道自然保護協会 前会長  
俵 浩三

このたび北海道自然保護連合は、日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定する要望書を環境大臣など関係行政機関に提出した。これは北海道の自然保護にとって意義が深いばかりでなく、北海道自然保護連合(以下・連合という)の、過去25年以上の活動成果の「仕上げ」の側面も持っている。といってもピンとこない人がおられるかと思うので、理由を説明したい。

### 25年以上の活動成果を踏まえて

その第1は日高横断道路との関係である。日高横断道路の建設計画が表面化したのは1979年であるが、連合はただちに「日高横断道路は原始性を誇る日高山脈の自然環境を破壊する」と強力な反対運動を始めた。しかし残念ながら行政は自然保護世論の高まりを無視して、1984年に着工してしまった。そのころは知床森林伐採問題、大雪山・土幌高原道路問題などがつぎつぎと起こったので、連合の活動の主力はそちらに注がれ、日高横断道路の反対運動は中断してしまった。

ところが知床森林伐採も土幌高原道路も、結果的には日高山脈の自然保護にプラスの効果をもたらした。すなわち知床森林伐採問題で国民



1984年 日高横断道路反対現地調査隊(道連合)

から批判を受けた林野庁は国有林経営のあり方を反省し、「森林生態系保護地域」という新しい自然保護制度を創設、知床半島につづき、1995年に「日高山脈中央部森林生態系保護地域」(6万6千ha)を設定した。これは日本の森林生態系保護地域のなかで最大面積を誇り、今後ここでは森林伐採などの開発行為が行われなくなった。ただし日高横断道路予定地付近だけは道路建設を容認するように凹んだ区域線となっている。この凹んだ線は今後、国立公園に指定

されれば正できると期待される。

また土幌高原道路の建設反対運動は1997年、北海道知事に「時のアセスメント」という公共事業見直し制度を創設させることになり、それは「時のアセス全国版」という国の公共事業再評価制度も生み出す契機となった。そして1998～99年、日高横断道路に対しても北海道と北海道開発局による事業再評価が行われたが、いずれも「事業継続」とされた。ところが事業再評価の中身を検証してみると「おごなり」ぶりが浮き彫りとなったので、北海道自然保護協会は「見直しの見直し」を求め、連合も反対運動を再開した。その結果、2003年、日高横断道路は未完成のまま建設が中止されたのである。

第2は夕張岳のスキー場開発との関係である。1980年代のリゾート開発ブームのころ、夕張岳の山頂一帯に国土計画（コクド）による大規模スキー場開発計画が浮上した。しかし夕張岳は「花の名山」である。そこでユウバリコザクラの会を中心として、「夕張岳のスキー場計画を撤回し、天然記念物の指定を求める」自然保護運動が起こり、連合も熱心にそれを支援した。その結果、スキー場計画は未着手のまま断念、1996年に「夕張岳の高山植物群落及び蛇紋岩メランジュ帯」が国の天然記念物に指定された。

第3は国有林・道有林の経営との関係である。現在の日高山脈～襟裳岬一帯は国定公園に、夕張・芦別山地は道立自然公園に指定されており、その区域の大部分は国有林で一部が道有林となっている。連合では知床森林伐採問題に象徴されるように、森林経営の赤字を穴埋めするために伐採がつづく国有林などの姿勢を批判してきたが、その国有林と道有林の経営は、1999～2003年にかけて抜本的に改革され、木材生産重視から森林の公益的機能重視に転換した。

このように近年の日高山脈と夕張山地を中心とする地域は、自然保護強化に有利な条件が整いつつあるが、それは過去25年以上にわたる連合の活動成果の反映でもある。

## 日高山脈・夕張山地の国立公園の可能性

それでは日高山脈と夕張山地は、国立公園としてどのような資質を持っているのだろうか。第1に自然環境の特徴は、①日本の山岳国立公園は火山地形を主体とするものが多いのに対し、日高山脈と夕張山地は日本に類例のない特異な地史をもつ構造山地で、氷河地形や蛇紋岩メランジュ帯を含み、②蛇紋岩やカンラン岩の超塩基性岩地に由来する固有種に富む高山植物群落など、多様な植生が発達し、野生生物の生息環境としても優れ、③原始性が豊かで日本最大の「原生流域」を含むなど、日本の風景を代表する傑出した自然の風景地である。

このうち原生流域とは、道路建設や森林伐採など人為的な影響を受けない河川流域で、『環境白書』（平成13年版）によると、日高山脈の原生流域は47,800haで日本第1位、それは第2位・大雪山の16,980ha、第3位・白神山地の12,648haの3～4倍の規模を誇っている。

第2に日高山脈と夕張山地の国立公園に想定される区域は、ほぼ全域が国有林と道有林で、その経営は木材生産より公益的機能発揮に重点が置かれているので、強力な自然保護施策を進めることが期待できる。またそのことは国際自然保護連合（IUCN）が定める国立公園の定義にも通じることになる。日本の多くの国立公園は広い私有地を含み、開発行為が認められやすいので、現状ではIUCNの国立公園定義に合致しないものが多い実態にあるが、日高山脈と夕張山地は、国際的な国立公園基準に合致する可能性を秘める数少ない存在である。

ところで現在の日高山脈は国定公園だから、国立公園になってもたいして変わらないと思う方がおられるかもしれない。しかし国定公園の管理は知事、国立公園の管理は環境大臣である。だから北海道知事は、自ら管理する国定公園の中心部に自ら日高横断道路を道道に認定して自然破壊道路の建設を進めてしまった。もし国立公園であれば知事はそのようなことができなくなる。また環境大臣が国立公園内で自然を破壊する開発行為を認めるようなことがあれ

ば、それに反対する自然保護運動は国定公園の場合より広く全国規模で、より強力で展開されることが期待できる。

日高山脈と夕張山地は日本に残された最後で最大の原始境である。ここを国立公園に指定すべきという世論は、まだ形成されていない。しかしこのようなことは、だれかが言い出さなければ始まらないので、2006年1月に北海道自然

保護協会がその声をあげ、連合もその趣旨に賛同して動きだした。今後は自然保護関係者ばかりでなく、地域住民や関係自治体など、さらには報道関係者にも理解が深まり、日高山脈と夕張山地を国立公園に指定すべきという世論が大きくなり、国立公園化が実現することを期待したい。



# 毎日新聞社のラリー撤退と今後の課題

十勝自然保護協会

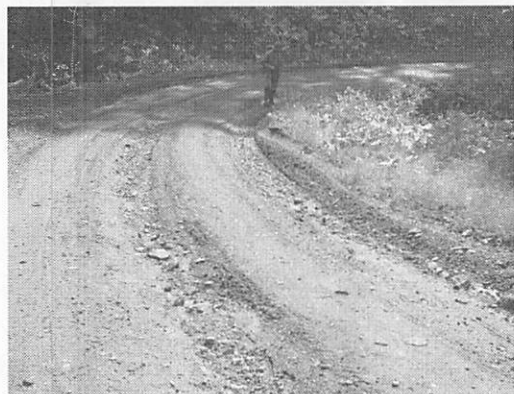
副会長 松田 まゆみ

## 林道をズタズタにしたWRC

2005年の世界ラリー選手権（WRC）は、9月30日から3日間にわたって十勝の林道などで開催されました。ラリーでは大半の林道が2度使用され、なかには4回使用された林道もあります。このため、一部の林道では深いわだちができ、ズタズタの状態になったところもあったようです。森林に生息する動植物に悪影響を与えたと思われますし、林道の地盤構造の破壊によって、大雨の際に侵食が助長されることが懸念されます。

競技当日、十勝自然保護協会の理事らが、新得町のコース出口で38台のラリーカーの騒音の測定をしたところ、87.4～103.5デシベルが記録されました（100デシベル以上は6台）。測定場所は高速で走るSS（スペシャルステージ）ではありませんから、SSではもっと大きな騒音が出ていることでしょう。

競技の翌朝に数名の理事がコースを視察した



2005年世界ラリー選手権 林道のわだち

ところ、林道入り口にはすでにグレーダーが入り、損傷した林道を早く隠すべく補修していました。林道はあちこちに深掘れの跡があったほか、残置されたフロントグリルの残骸やタイヤ、ミラーへの衝突の痕跡などが確認され、ラリーの凄まじさを物語っていました。

新得町の林道は3日目の最後のコースで、リタイヤにより競技車数が減っているのにも関わらずこの惨状です。1日目、2日目のコースはおそらくもっとひどい深掘れや損傷があったことでしょう。テレビ放映された映像でも路外に勢いよく飛び出す車の様子などが映し出されていました。

## 毎日新聞社の撤退宣言

WRC開催のおよそ1ヶ月後の10月28日、十勝毎日新聞は毎日新聞社がWRCからの撤退を決めたことを報じ、翌日には北海道新聞も報道しました。新聞記事によると、撤退の理由は開催に伴う経費負担が大きすぎるということでした。2004年のWRCでは約8億円もの赤字を計上したそうですから、とても採算のとれるようなイベントではないことがはっきりしました。テレビの映像でも、林道の観戦席は観客もまばらな様子でした。

ところで、毎日新聞社は、自然保護団体が再三にわたり問い続けた「環境問題」については、なんら言及することなく、また質問に回答することもなく「撤退」という形で終止符を打ってしまいました。毎日新聞社は公言を反故にして絶

滅危惧種の生息地でラリーを行い、環境調査報告書も提出しなければ話し合いにも応じなかったのです。自ら掲げた環境対策がクリアできなかったことは明らかであるのに、この問題に口をつぐんだまま撤退するのは社会的公器である新聞を発行する会社としてあってはならないことです。責任放棄としかいいようがありません。

ラリーに反対してきた十勝自然保護協会・北海道自然保護協会・北海道自然保護連合・ナキウサギふあんくらぶの4団体は、撤退後も毎日新聞社に環境調査報告書の提出を求めましたが、これに対しても無視を続けています。

十勝自然保護協会が毎日新聞の不買運動で毎日新聞社に求めたのは、毎日新聞社が公言を守り誠実な態度をとることでした。しかし、毎日新聞社はラリー撤退後も自然保護団体に誠実な対応をせず、無視を貫いています。マスメディアがこのような態度をとり続けているのでは不買運動を取り下げるわけにはいきません。HPでの毎日新聞の不買運動はまだ続けています。

#### 毎日新聞社のWRC誘致がもたらしたもの

毎日新聞社がWRC誘致を目標にして2001年から開催してきた国際ラリーによって、十勝には国際ラリーが定着しつつあります。国内のラリー大会ももちろん問題ですが、より規模の大きな国際ラリーは、環境への影響も当然大きくなります。十勝毎日新聞社は、昨年からアジアパシフィックラリー選手権を主催していますが、今年も同大会を主催する予定です。

毎日新聞社がラリーから撤退したといっても、毎日新聞社と組んでラリーを主催してきたAG、メンバーズスポーツクラブ北海道は、WRC開催を断念したわけではありません。今年も日本でのWRC開催が予定されています。毎日新聞社に代わるスポンサーが現れば、またラリーが開催されるでしょう。問題なのは、WRCを引き継ぐ団体がラリーの環境問題をどのように考えているかということです。

毎日新聞社は自ら課した環境対策を守れず、自然保護団体に説明ができない状況に陥りました。ラリーからの撤退は、経済的な負担だけが

理由だったわけではないでしょう。しかしラリーを引き継ぐ十勝毎日新聞社も、AG、メンバーズスポーツクラブ北海道も、「環境に配慮したラリー」を掲げているわけではありません。毎日新聞社が「環境に配慮したラリー」を掲げて誘致したラリーは、撤退によってもはや環境対策という「タガ」が外れてしまったと同然です。

そもそも毎日新聞社の実施した環境調査も、十分なものとはいえません。特に影響が懸念される猛禽類などの調査は不十分と考えられるものです。絶滅危惧種が生息しているとして問題になった新得町以外の林道でも、クマタカやオオタカなどの猛禽類が生息している可能性は極めて高いのです。それにも関わらず、毎日新聞社は「環境対策」の引き継ぎすらせずに「撤退」で責任を放棄したのです。

毎日新聞社が「環境の毎日」を標榜するのであれば、マスメディアとして自らの責任の重さを認識し、日本からの国際ラリーの撤退を働きかけていくべきではないでしょうか。

改造車であるラリーカーは、普通の車の10倍もの排気ガスを排出するといわれています。林道を損傷し、生態系に悪影響を与えるラリーは、環境問題に真剣に取り組まねばならない21世紀において「時代に逆行」するイベントに他なりません。日本の自動車メーカーも、ラリーではなく「環境への負担の少ない車」の開発に力を入れるべきでしょう。

私たちは、今後のラリー実施についても注目し、行動していくつもりです。



2005年世界ラリー選手権 林道の土砂

# トラスト地取得報告

NPO真駒内・芸術の森緑の回廊基金  
代表 小林 保則



トラスト地2号地

私は以前から、都市のリサイクルを訴えていました。都市の機能を郊外に郊外に拡大して、いわゆる都市そのものが、中心から古びて崩壊していく社会を止めて、都市の機能そのものを使い捨てにしない都市の発展を願っていました。最近コンパクトシティという表現で、都市の拡大を止めようとする人も増えています。それでも現実には、いろいろな規制を逃れ小型化した自然破壊があちこちで起こっています。

札幌市南区真駒内駅の東側に隣接する真駒内

保健保安林は、雄大な支笏洞爺国立公園から続く「緑の回廊」の北端に位置し、しかも住宅地に接していますが、エゾモモンガをはじめ、キタキツネ・エゾリス・エゾフクロウ・キテン等の多くの動植物が生息しています。真駒内保健保安林が孤立しないよう、私たちは真駒内保健保安林の南側の民有林をトラストの手法で保全する活動をしています。そして、トラスト地を団体名義で所有するために昨年法人化し、1年が経ちました。法人化してすぐに前もって手当てしていた280㎡のトラスト1号地を取得し、



さらに今年になってトラスト1号地に隣接する6395㎡のトラスト2号地を取得することができました。この付近は、昭和40年代に現状有姿分譲によって土地が図面上で細分化されていますが、トラスト2号地は分譲の際に道路敷地として残された土地を含み、8m幅全長約800mあり、約3.6haの敷地の中を張りめぐらされています。この土地の取得は、今後このあたりの開発の抑止力となるでしょう。

トラスト所在地は、真駒内保健保安林から南方向に真駒内第一都市環境緑地～自衛隊敷地と真駒内河畔林を繋いで「緑の回廊」を形成するのに重要なエリアです。また、トラスト地に隣接する真駒内川河畔林には、2000年に環境省から絶滅危惧Ⅱ類に指定されたニホンザリガニやヘイケボタルもわずかながら生息しており、植物に関しても興味深い種が自生していて、これ

らの生息を保全するためにもこのトラスト地は重要な森林です。

こうして少しずつゆっくりと助走を始めました。やがて力を付けて、この会の活動に参加してくれているすべての人の想いが結実するような森の姿が見えるように歩みを進めていきたいと思っています。トラスト2号地に関しては特殊な事情だったので、破格で取得できましたが、札幌近郊は地価が高く、早急に基金の充実を図らなくてはなりません。

最後になりましたが、今まで会員の方々をはじめ多くの方々にご寄付の協力を得、ここまで活動してこれたことを感謝申し上げ、今後も回廊基金の趣旨にご賛同いただき、多くの方々の入会また寄付のご協力をいただけますようお願い申し上げます。



トラスト地2号地と新田事務局長



トラスト地3号地と左下は真駒内川

「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定する」要望書を環境省へ提出しました。又、林野庁と北海道にも合わせて要望書の提出を行いました。

2006年3月18日

環境大臣 小池百合子 様

北海道自然保護連合	代表 寺島 一男
沙流川を守る会	会長 山道 康子
日高山脈を守る会	会長 安井 幸紀
ユウパニコザクラの会	会長 梅木 久嗣
南北海道自然保護協会	会長 宗像 和彦
千歳の自然保護協会	会長 明野 幸久
大雪と石狩の自然を守る会	会長 寺島 一男
十勝自然保護協会	会長 安藤 御史
日高山脈ファンクラブ	会長 樋口 和生
NPO真駒内・芸術の森緑の回廊基金	会長 小林 保則
北海道勤労者山岳連盟	会長 安田 治

## 日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定することの要望書

北海道の日高山脈と夕張山地の主要部は、現在、日高山脈襟裳国定公園（昭和56年10月1日指定・公園面積10万3千ha）および富良野芦野別道立自然公園（昭和30年4月19日指定・公園面積3万5千ha）に指定されています。その特徴（別記説明書参照）の要点は、①日本には類例のない特異な地史をもつ構造山地で、氷河地形や蛇紋岩メランジュ帯を含み、②固有種に富む高山植物群落や亜寒帯性森林が発達し、野生動物の生息環境としても優れ、③原始性が豊かで日本最大の原生流域（環境白書・平成13年版）を包含するなど、わが国の風景を代表するとともに、世界的にも誇り得る傑出した自然の風景地です。

また、④想定される公園区域のほぼ全域が国・公有地（林野庁の国有林、北海道有林）で、自然環境保全に適しているばかりでなく、⑤農業・畜産業・林業・地下資源の開発や道路建設など、各種の開発による自然破壊の恐れが少なく、⑥主要な山岳や溪流は、登山などアウトドア活動や野外自然教育の利用に供されております。

とくに近年は「夕張岳の高山植物群落と蛇紋岩メランジュ帯」の天然記念物指定（文化庁、平成8年）、国有林経営が「国民の森林」として木材生産重視から公益的機能重視へ転換（平成11年）、道有林経営の木材生産を目的とする皆伐・択伐の廃止（平成13年）、主要道道静内中札内線（日高横断道路）の建設中止（北海道、北海道開発局、平成15年）など、自然環境保全にとって有利な状況が生まれております。したがって国有林当局および道有林当局の理解と協力が得られるならば、ほぼ全域が特別保護地区と第一種特別地域からなる、事実上の「営造物公園」に相当する国立公園を実現できる可能性を秘めております。

このような特徴は、環境省が定めた「自然公園選定要領」の第一要件（景観）、第二要件（土地）、第三要件（産業）、第四要件（利用）のすべてにおいて、高い評価が得られる資質を有しています。北海道には、すでに阿寒、大雪山、支笏洞爺、知床、利尻礼文サロベツ、釧路湿原の6カ所の国立公

園が指定されておりますが、自然公園選定要領によれば、国立公園は「第一乃至第四の要件を具備するものについては配置を考慮しない」、すなわち箇所数にこだわらず選定すべきこととされております。

さらにまた、IUCN（国際自然保護連合）のUnited Nations List of Protected Areas 2003によれば、日本の国立公園の大部分は私有地などを含む「地域制公園」の特性を反映して、カテゴリーVの景観保護地域に区分されていますが、日高山脈と夕張山地は、想定される公園区域のほぼ全域が国・公有地で、地域住民の集落も存在しないため、カテゴリーIIの国立公園、すなわち、現在と将来の世代に一つ以上の生態系を完全な状態で保護する、その地域の指定目的に反する開発や居住を排除する、環境と文化に調和した、精神的、科学的、教育的活動と、レクリエーションと観光客のための機会の基盤を提供する、という国際的な国立公園の定義に合致し、日本では数少ないカテゴリーII型の国立公園になり得るものと考えられます。

現在の日本の28カ所の国立公園はすべて20世紀に指定されたものですが、国土の土地利用の実態を踏まえれば、21世紀に国立公園の量的拡大を図ることは、もはや困難になっています。そうした中で求められるのは、国立公園の質的な充実を図ることです。それは国立公園の観光開発を促進することではなく、自然公園法改正（平成14年）で新しく国などの責務とされた「生物多様性の確保」にも大きく貢献できる、カテゴリーII型の実態を備える国立公園を少しでも多くすることです。日高山脈と夕張山地を新しい国立公園に指定することは、そうした観点からもきわめて意義の深いことと考えます。

したがって環境省は、林野庁、北海道との連携を密にして、国民や道民の意向も汲みながら、関係資料を収集して客観的に評価し、その上で日高山脈と夕張山地を国立公園候補地に選定し、中央環境審議会に諮問するなど、国立公園指定に向け特段のご尽力をくださるよう、要望いたします。

なお林野庁長官および北海道知事に対しては、本要望書の写しを添え、別紙写しのとおり要望いたしましたので、申し添えます。

---

## （別記説明書）

### 国立公園候補地としての日高山脈・夕張山地の特徴

国立公園として想定される区域は、現在の日高山脈襟裳国定公園（面積10万3千ha）および富良野芦別道立自然公園（面積3万5千ha）を中心におき、やや拡張した範囲を、また夕張山地は夕張岳・芦別岳・岨山を主体とする範囲（山麓のダムなどは除外）を想定することが望ましい。なお日高山脈と夕張山地は飛び地の関係となる。

それらの国立公園候補地としての特徴と資質は、次の7点に集約することができる。

#### 1. 日本では類例のない特異な生い立ちと地形

日高山脈と夕張山地は、北海道の脊梁山脈の一部を構成する、標高千数百～2千m級の構造山地で、火山地形の多い日本の国立公園の中で、日本を代表する非火山性の「構造山地連峰」の景観形式である。しかもその成立過程は、日本には類例のない特異な、プレートの接近、衝突、隆起に起因している。

すなわち日高山脈は、白亜紀以降の北米プレートとユーラシアプレートの収束過程において、北米プレートの一部をなす島弧性プレート（北海道東部）が西方のユーラシアプレートとの間にあった海洋性プレート（北海道中部）に衝突、衝上したため、地下深部で高温・高圧のもとで変成・変形してできた島弧地殻岩石が隆起し、形成された。現在、日高山脈の東側から西側へ山脈に平行な帯状配列をしている、ホルンフェルス・片岩・片麻岩・グラニュライトなどの変成岩や、花崗岩・トーナル岩・ハンレイ岩などの深成岩は、この島弧地殻（プレートの上部）の岩石である。その一方、山脈のさ

らに西側にはかつての海洋性プレート（地殻）の岩石であるオフィオライトが見られ、島弧地殻岩石が日高主衝上断層にそってこの海洋地殻岩石にのしあがっている。したがって、日高山脈を東から西に横断すると、かつての島弧地殻の浅部から地下25kmを超える深部の岩石、さらに海洋地殻の岩石が観察できる。日高主衝上断層にそっては、さらに深部のマンツルの岩石（カンラン岩）が見られる。国の特別天然記念物に指定されている山脈南部のアポイ岳はこの地下100kmを超える深部の岩石からなり、マンツル研究から世界的に注目されている。

このように、地下深部にいたる島弧（大陸）地殻の岩石の存在状況や相互関係を、地表で観察できるところは、日高山脈のほか、アルプスのイブリア帯やヒマラヤのコヒスタン帯などが知られるのみで、世界的にもきわめて貴重な研究・教育のフィールドである。

また新第三紀末から第四紀更新世にかけ、日高山脈の隆起が加速されたため浸食が激しくなって、鋭い稜線と急峻な斜面、深い溪谷をもつ山岳地形が形成され、さらに更新世後期の複数回の氷期には、主脈の東側に100カ所を超えるカール（氷河地形）が発達し、日高山脈の山岳景観を特徴づけている。なお日高山脈の最南端は、約2万年前のマンモスの臼歯化石で知られる襟裳岬の岩礁となって海中に没し、特有の優れた海岸景観美を形成している。

一方の夕張山地は、前記の北米プレートとユーラシアプレートとの間にあった中生代の海洋性プレートの岩石が、プレート収束による東側からの圧力の影響を受けて隆起し、形成されたものである。海底火山に由来する枕状溶岩が芦別岳などの山体を形成し、夕張岳ではカンラン岩から変質した蛇紋岩が他の岩石塊をとりこんだメラングジュ（起源の異なる岩塊の混合）をなし、それらが浸食からとり残されたノッカー地形をつくるなど、特異な山岳景観が特徴となっている（夕張岳の蛇紋岩メラングジュ帯は高山植物群落とともに天然記念物指定の根拠とされた）。

以上のように日高山脈と夕張山地は、日本列島形成史の中でも特異な存在であり、その山岳は急峻、雄大で、しかも多数のカールが見られるなど、優れた山岳景観を有し、次に述べる植生景観、原始性などと併せ、日本の風景を代表するに足る傑出した自然の風景地である。

## 2. 原始性の豊かな森林と固有種に富む高山植物など

日高山脈と夕張山地の植生は、大半が冷温帯から亜寒帯へかけての特徴を示すが、地形・地質の影響を受けて、この地域特有の生態系が成立している。

日高山脈は急峻な地形のため、とくに東側では雪崩の影響により針葉樹林が少なく、ダケカンバ林が優勢となっているのに対し、西側には針葉樹林がよく発達する。西側の針葉樹林のうちでも、とくに南部の幌満付近には温帯性のゴヨウマツ群落（国の天然記念物）、北部の沙流川源流域には亜寒帯性のエゾマツ・トドマツ群落（国の天然記念物）が見られ、主稜線部はハイマツ帯となっている。それに対して夕張山地では、落葉広葉樹林、針葉樹林、ダケカンバ林、ハイマツ帯の順序で植生の垂直的な帯状分布が認められる。いずれの山地でも植生の大部分が植生自然度9（自然林）～10（自然草原）を示し、植林地は少なく、原始性が豊かである。

またカンラン岩や蛇紋岩の基盤を有する山域では、超塩基性岩植物に特徴づけられる高山植物群落が発達している。すなわち、日高山脈南部のアポイ岳では標高が800m程度と低いにもかかわらず、中腹から山稜にかけてアポイカンバ、ヒダカソウ、エゾコウゾリナなどの固有種に富む高山植物のお花畑（国の特別天然記念物）が見られ、夕張岳では、ユウバリソウ、ユウバリコザクラ、シソバキスミレ、ユキバヒゴタイなどの固有種（ユキバヒゴタイは夕張岳と日高山脈に限った固有種）を含むお花畑（国の天然記念物）が広がっている。さらに岨山では石灰岩植生が発達し、石灰岩植物のキリギシソウ（固有亜種）やオオヒラウスユキソウなどが見られる。

ちなみに日高山脈と夕張山地の北海道固有植物（固有種・固有変種など）の数は、研究者により若干の相違があるが、日高山脈では23分類群、夕張山地では22分類群を数え、大雪山の14分類群、知床の4分類群と比較して、圧倒的に多い特徴がある。

このような険しい地形と自然性の豊かな植生に支えられ、日高山脈と夕張山地は野生動物にとっても優れた生息環境となっている。大型哺乳類では特別な固有種はないが、エゾヒグマやエゾシカの生息密度が高く、とくに日高山脈のカール付近などでは、エゾヒグマが出没することが稀ではない。またカールのモレーン（氷河作用で削られた岩塊の丘）などは氷期の遺存種とされるエゾナキウサギの生息の場となっており、山頂部だけでなく中腹の森林地帯の岩場にもエゾナキウサギ（夕張岳では保護に留意すべき地域個体群）が生息している。その他、エゾクロテン、キタキツネ、エゾオコジョ、ホンドイタチなどの姿を見ることができる。

野鳥も森林や高山の植生を反映して豊かで、森林帯にはクマゲラ（国の天然記念物）をはじめ、エゾライチョウ、コマドリ、コノハズク、キクイタダキなど、また高山ではギンザンマシコ、ホシガラスなどが見られる。昆虫では高山蝶として、ダイセツカカネヒカゲ（国の天然記念物）、カラフトリシジミ（国の天然記念物）などが生息し、またヒメチャマダラセセリ（国の天然記念物）はアポイ岳が日本で唯一の隔離分布地となっている。なお襟裳岬では、ゼニガタアザラシ（絶滅危急種）を身近に観察することができる。

### 3. 日本最大の原生流域

前記のように日高山脈と夕張山地は自然性の豊かな植生と野生動物に恵まれているが、それは「原生流域」の広さからも裏づけることができる。原生流域とは、面積が1,000ha以上にわたり、道路やダムなどの人工工作物および森林伐採などの人為的影響の見られない河川流域のことで、『環境白書』（平成13年版）は全国の原生流域のベストテンを掲げている。その5位までを挙げると、①日高山脈襟裳国定公園・47,820ha、②大雪山国立公園・16,930ha、③白神山地自然環境保全地域・12,648ha、④磐梯朝日国立公園・12,520ha、⑤越後三山只見国定公園・10,762ha、となっている。ちなみに昨年、世界自然遺産に登録された知床国立公園は4,870haで10位である。

すなわち日高山脈の「手つかずの自然」の広さは、2位以下を大きく引き離して全国一の規模を誇っている。このような原始的な自然環境は生物多様性の観点からも重要な地位を占め、国立公園などにおける「生物多様性の確保」は自然公園法改正（平成14年）により国などの責務に加えられている。したがって「新・生物多様性国家戦略」の上からも、国の責務として国立公園に指定し、「国土における生物多様性保全の骨格的な部分、屋台骨としての役割を、より積極的に担っていく」ことが重要である。

また日高山脈襟裳国定公園の主要部は「わが国の主要な森林帯を代表する原生的な天然林」として、林野庁が「日高山脈中央部森林生態系保護地域」（面積66,353ha）に設定しており、これは日本最大の森林生態系保護地域である。

さらに生態的ネットワーク形成の観点から見ると、日高山脈襟裳国定公園と大雪山国立公園を結ぶ稜線部分は、林野庁の「緑の回廊」（大雪・日高「緑の回廊」）が設定されているので、日高山脈を国立公園とすることにより、よりいっそう強力な有機的ネットワークを機能させることができる。

### 4. ほぼ全域が国有林と道有林

日高山脈と夕張山地は、どの範囲を国立公園区域とするかによって異なるが、仮に現在の国定公園

と道立自然公園区域で試算すれば、97%以上が国有林と道有林によって占められることになる。すなわち、現在の日高山脈襟裳国定公園は面積103,447haのうち、88,807ha (85.8%) が国有林、12,221ha (11.8%) が道有林で、合計97.6%が国・公有地である。また富良野芦別道立自然公園は面積35,756haのうち、34,522ha (96.5%) が国有林、393ha (1.1%) が公有地である。それを総計すると、139,203haのうち123,329ha (88.6%) が国有林、12,614ha (9.0%) が公有地（大部分が道有林）で、全体の97.6%が国・公有地となる。これは既存の28国立公園の平均国有地率61.6%よりはるかに高く、大雪山国立公園の99%について第2位の高い国・公有地率である。

しかも国有林の経営は、平成11年に抜本改革が行われた。『林業白書』（平成11年版）は、「国有林野の抜本的改革の基本的な考え方は、国有林野を『国民の共通財産として、国民参加により、国民のために』管理経営し、名実ともに『国民の森林』とすることにある。…これまでの木材生産に重点を置いた管理経営から、国土の保全などの公益的機能の発揮に重点を置いた管理経営へと転換することになっている」と記している。

そして当該地域の国有林の大部分は、水土保持林、森林と人との共生林で、資源の循環利用林はきわめて僅かである。したがって当該地域では、国有林の管理経営目的を国立公園の目的に一致させることが、もっとも有効かつ適切な公益的機能の発揮に連なるといえる。

また道有林も平成13年に経営方針を抜本転換し、「木材生産を目的とする皆伐・択伐を廃止し、…公益性を全面的に重視した道有林の整備を推進」する（『北海道森林づくり白書』・平成14年版）こととなった。

したがって日高山脈と夕張山地のほぼ全域は、事実上の特別保護地区と第一種特別地域に相当する、「営造物公園」に匹敵する、質の高い自然環境保全施策を実現できる潜在的可能性を有していることになる。

## 5. 農林業など開発の可能性が少なく日高横断道路も建設中止

日高山脈と夕張山地は前記のように、ほぼ全域が国有林と道有林で積極的な木材生産が行われる予定はない。また国有林・道有林内には地域住民の集落がなく、国土利用計画法に基づく土地利用基本計画でも、当該地域は「森林地域」と「自然公園地域」の重複地域であり、「農業地域」は該当していない。したがって将来とも農地や草地の造成などが行われる見込みはなく、また宅地開発などの行われる可能性もない。

鉱業権の状況は未確認であるが、現在操業中のところは幌満付近のカンラン岩採取がある程度で、その他の鉱種は、たとえば試掘権・採掘権の設定がなされていたとしても、採掘される可能性は低いものと思われる。

近年の日高山脈で行われていた最大の建設事業は、主要道道静内中札内線（日高横断道路・静内町から日高山脈の主稜をトンネルで横断し中札内村に至る開発道路、北海道と北海道開発局が区域を分けて施工）で、昭和59年に着工されたが、自然保護の反対世論が盛り上がり、財政事情の悪化もあり、北海道知事は平成15年に未完成のまま建設を断念し、北海道開発局長も同年、工事を中止した。工事区間は主稜線に予定されたトンネル部分には及んでいない。

また夕張岳では、昭和60年代のリゾートブームを背景に、大手観光デベロッパーにより大規模なスキー場開発が計画されたが、やはり自然保護世論の反対があつて計画が撤回され、さらに天然記念物指定を求める世論に押され、山頂部が国の天然記念物に指定（平成8年）された。

このように日高山脈と夕張山地は、各種の開発事業による自然破壊の恐れは少なく、自然環境保全施策を強力に進められる可能性をもっている。

## 6. 登山の聖地で典型的なバックカントリー

日高山脈の大部分は、一般的な登山歩道の整備はなされておらず、アメリカの原始地域・バックカントリーに相当するような原始的な地域が多い。そのため登山関係者からは「日高山脈は登山の聖地」として、崇められながら親しまれている。その一方、アポイ岳は一般的な登山ハイキングや自然観察会に適し、また最高峰の幌尻岳(2,052m)は深田久弥の「日本百名山」のひとつであることから、多くの登山者が訪れている。

そうした登山者などのため、幌尻山荘、ニイカップポロシリ山荘、ペテガリ山荘、神威山荘、楽古山荘、戸蔦別ヒュッテ、札内ヒュッテなどの(非営利的)山小屋が整備されており、また山麓周辺地域には、日高山脈館(日高町)、アポイ岳ビジターセンター(様似町)、日高山脈山岳センター(中札内村)、夕張市石炭博物館(夕張市)など、野外自然教育や情報提供施設が公的に整備されている。

## 7. IUCNの国立公園定義に合致

IUCN(国際自然保護連合)では各種の自然保護地域を6種類のカテゴリーに区分し、各国ごとの自然保護地域のリストを公表している。

そのうち国立公園はカテゴリーⅡで、その定義は、現在と将来の世代に一つ以上の生態系を完全な状態で保護する、その地域の指定目的に反する開発や居住を排除する、環境と文化に調和した、精神的、科学的、教育的活動とレクリエーションと観光客のための機会の基盤を提供する、となっている。これはアメリカ型の「営造物公園」を意識した定義といえる。

しかし日本の国立公園は民有地などを含む「地域制公園」の制度であるため、多くの国立公園の実態はこの定義に合致せず、カテゴリーⅤの景観保護地域に区分されている。景観保護地域の定義は、「長年にわたる人と自然の相互関係が、その地域に重要な美的、生態学的あるいは文化的価値、ときには高い生物多様性などの明瞭な特徴を作りだしてきた地域で、このような人と自然の相互関係が保全されることが、地域の保護、維持、発展のためきわめて大切な地域」とされている。

そうした中で、日高山脈と夕張山地はほぼ全域が国・公有地で、しかも「指定目的に反する開発や居住を排除する」ことが実現できる可能性を有しているので、当該地域が国立公園となれば、日本では数少ないカテゴリーⅡ型の国立公園として、「現在と将来の世代に一つ以上の生態系を完全な状態で保護する」ことに貢献できることになる。

なおIUCNのリストは数年ごとに公表されるが、1997年版と2003年版での日本の国立公園に対するⅡ型とⅤ型の区分には差異、ばらつきがあり、その評価は定まったものとはいえない。しかし、いずれにしても日本の「地域制公園」の多くがⅤ型となる傾向の中で、Ⅱ型の実態を備える国立公園が新しく生まれる意義は大きいものといえる。

## 環境省などへの 「要望書」提出について

当北海道自然保護連合など11団体は、環境省と林野庁・北海道へ「日高山脈と夕張山地を新たな国立公園に指定する要望書」を3月18日に提出しました。

1月30日、社団法人北海道自然保護協会さんより、環境省などへ「要望書」の提出をした旨と、当連合にも同様の活動推進の要請がありました。2月18日、当連合常務委員会を開催し、当連合加盟団体と未加盟の関係自然保護団体へ連名での「要望書」提出の呼びかけを行ったところ、11団体の連名での提出となったものです。「要望書」の文章は、常務委員会検討では北海道自然保護協作成（同協会の同一文の使用可の指示あり）のものに加筆など不必要との判断がなされました。

### 会費納入のお願い

団体会員と賛助会員の皆様、自然保護活動や

自然に親しむ活動などご活躍のことと存じます。

本年度の会費を同封の郵便振込み用紙にてお振込みをお願い申し上げます。

なお、既にお納めの会員への用紙配布は、どうぞご容赦下さい。 事務局

表紙写真 小山 健二

## 北の自然 No.76

2006年4月30日発行

発行 北海道自然保護連合  
事務局 札幌市南区川沿10条3丁目12-2  
小山 健二様方  
TEL・FAX 011-572-2069  
発行人 寺島 一男

賛助会費 年間3,000円  
郵便振替 02710-5-4071

印刷 株式会社北海道機関紙印刷所



《全日本登山とスキー用品専門店協会会員》  
**登山とアウトドア専門店**  
**秀岳荘**

(本店) 〒001-0012 札幌市北区北12条西3丁目  
TEL011(726)1235  
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

(白石店) 〒003-0026 札幌市白石区本通1丁目南2  
TEL011(860)1111  
営業時間 AM10:30~PM7:30 ●水曜定休

(旭川店) 〒070-8045 旭川市忠和5条4丁目  
TEL0166(61)1930  
営業時間 AM10:00~PM7:00 ●月曜定休

<http://www.shugakuso.co.jp>